INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ

ニュース
NO.77

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1995年5月20日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウスミタケビル102
TEL. 03-3821-3737
FAX. 03-3821-6479
発　行　人　住友　義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

◈第18回MRA国際会議レポート

●小田原国際ダイアローグ

《テーマ》
『道義国家を目指して
—共に生き、幸せを分かちあうために』

●期間：平成6年10月8日～17日●場所：小田原、東京、浦和、神戸
＝小田原と東京で国際ダイアローグも開催＝

小田原国際会議とダイアローグに二百人近くが参加

第十八回MRA日本キャンペーン『道義国家を目指して—共に生き、幸せを分かちあうために』が、昨年十月八日から十七日にかけて、アジアセンターODAWARAで開かれた小田原国際会議を皮切りに、東京、浦和、神戸等で行われました。特に今回は、小田原と東京で関係諸団体との共催で二回の国際ダイアローグを開催し、好評を得ました。

十月八日から十日まで開かれた小田原国際会議には、カンボジア、ミャンマー、台湾、中国、イギリス、ニュージーランド、そして地元日本から延べ百人近くが参加し、三日間にわたって熱心な話合いがなされました。

開会式では住友義輝当協会会長が、「この会議を終えて、豊かな心で家路に就けるよう、みんなで協力していい会合にしていきましょう。たっぷり心に充電したら、それを放電することが大切です」と参加者に呼びかけた後、神奈川大学経営学部の松岡紀雄教授が次のような基調講演（以下、発言は全て要旨）を行いました。

「20世紀は激動の時代と呼ばれていますが、21世紀はさらなる大激動の時代となり、次のような非常に困難な様々な課題に直

□主な内容□

◆MRA日本キャンペーン　1P
第18回MRA国際会議レポート

◆シリーズ「アジアを知る」①
東南アジアの体験から　10P
「東南アジア通信」編集長　五十嵐勉

◆MRA月例会シリーズ　18P
水木楊の「日本改革論」（前半）
日本経済新聞社取締役論説委員
市岡揚一郎

面するでしょう。

現在、世界の人口は56億6千万人ですが、2025年には85億、2050年とは100億に増えると予測されています。これだけの数の人々が平和裡に幸せな時代を共に築いていくためには相当な努力を必要とします。つまり、今回の会議のテーマである『道義国家』を目指して、共に生き、幸せを分かちあう心を高めていく以外に人類が21世紀を生き抜くすべはないのです。

そのためには、食糧、環境、気候、資源などの問題を考えていかなければなりません。特に20世紀の繁栄を支えてくれた石油は2億年という長い時間をかけてできたものです。その石油を今たまたまこの地球上に生きている我々が、僅か二百年ばかりのうちに全部使い果たそうとしています。2億年かけて作られたものを二百年で使い尽くしてしまうようなことが許されるはずがありません。

これからの『道義国家』とは、たんに悪いことをしないとか、つつましい生活をするというだけでは許されない時代を迎えました。これからの時代は次のようなことが必要となります。

①世界の人々、そして先祖や自然と『共に生き、幸せを分かちあう』という決意を新たにする。

②日本人は世界中の様々な事実をもっと知り、真剣に受け止める。

③若者がこれからどういう生き方をしていくか、そして取り組むべき課題は何かということを考えさせる教育が大切。

④子孫と我々の生存のための科学技術の開発。

⑤信頼に値する政治に導く努力が大切。日本と世界に対して政治が大きな責任を果たしていけるような努力を国民がしなければならない。たんに政治家を批判して憂さ晴らしをするようなことは許されない。

⑥フィランソロピー・セクターの役割りを日本でも考える。

21世紀は民間非営利団体や組織が大活躍するボランティアの世界になるでしょう。MRAの役割もかけがえのないものになると思います。日本人は働きすぎだからもっと遊ぶべきだという見方は間違っています。問題は、何のためにどういう働き方をするのかということでしょう。たんに自分の豊かさや自分の企業の繁栄だけを求めることは許

●関西秋季大会の参加者一同（住友金属工業住吉研修所）

●関西秋季大会でスピーチする台湾の王旭光・魏晴秋夫妻

●基調講演を行う松岡教授

されないことですが、この地球が生き残り、人類の子孫がよりよい社会に住めるようにするために働くならば、どんなに働きすぎても批判されるいわれはありません。軍縮や経済の競争ではなく、道義の競争をするということであり、これこそまさにブックマン博士の提唱したMRAの精神ではないでしょうか」。

三十二年振りの日本

夕食後に一回目の全体会議が行われ、三十二年振りの来日を果たしたニュージーランドのキース・ハニング氏（羊5千頭と牛80頭を飼育している農場主）がユーモアを交えながら次のようにMRAとの出会いと、自らの生き方に与えた影響について語りました。

「普段は家内と二人で農場を経営していますが、羊毛の刈入れ時期には人を雇い入れます。一日に一人当たり300頭もの羊の毛を苅るので、大変な重労働です。ニュージーランドはとても小さな国で人口も少ないので、もし羊に投票権が与えられたならば人口はひとたまりもありません。最近、ニュージーランドはラグビーでオーストラリアに打ち負かされたのですが、一週間にわたって国家的な喪に服しました。

さて、私が初めてMRAに出会った時、私は農業を学んでいましたが、同時に世界の様々な出来事に関心を持っていました。私のようなごく普通の人間でも、世界を変革する仕事の一端を担えるというMRAの考え方は私の心を捉えました。しかし、そのためには先ず自ら変わる、そして正直、純潔、無私、愛という4つの絶対基準に沿った生き方をするということは、学生であった私にとって大変に困難なことでした。しかし私は先ず、父に対してそれまであまりよいといえなかった関係について謝り、新しい関係を築くことができました。

その後私は九年間MRAのフルタイムとして働きましたが、両親はその間、経済的にはもちろん他の様々な面で私を支えてくれました。MRAとは、四つの絶対基準を守り、朝静かな時間を持てばいいというものではなく、さらに奥深い意義を持つものです。MRAのメッセージと精神をそれぞれの国に伝えていくという課題が私たちに与えられています」。

日々の感動を生活の中に生かす

続いて、相馬雪香さん（難民を助ける会会長）が日本と日本人の在り方について次のように参加者に警鐘を発しました。

「日本は太平洋地域の一員として何を考えているでしょうか。何もあまり考えてはいないのではないでしょうか。日本は自分のことを考えるのに忙しくて、他の国のことに心を配っていないのではないでしょうか。

この間、九十七才の加藤シヅエ先生の会合に千人が集まりました。どうしたら九十七才まで元気でいられるのかと多くの人が聞いていました。加藤先生は、一日に十回感動することだとおっしゃいました。するとある人が、どうしたら感動できるんですかと聞いていましたが、そんなことまで聞かなくては分から

●相馬雪香さん

●キース・ハニング氏（ニュージーランド）

ないのではダメです。感動することを知らない人間が日本に沢山いるということを恥ずかしく思います。感動する、そしてその感動を生活の中に活かすことが明日の日本を変える道につながると思います。一人ひとりが本当にその気にならないと日本はいつまでたっても変わりません」。

変わりつつあるミャンマーの現況

続いて、東京で光貿易という会社を経営するミャンマーのキョウ・ウィン・トン氏がミャンマーの現況、そして民主主義の大切さについて次のように語りました。

●キョウ・ウィン・トン氏（ミャンマー）

「今日、ミャンマーは大きく変わりつつあります。ミャンマーの繁栄はもとより、変化を受け入れられる安定した国家が私たちの願いです。これまでミャンマーでは不安定な時期が続いてきたことを率直に認めなければなりません。憎しみ、紛争、誤解、そして無関心によって災難がもたらされました。三十年間にわたった鎖国状態は私たちに大変な損失を与えました。その結果、知識や創造力といったものも国家経済同様貧しいものとなりました。私たちは今、それらの過ちを認め、それらを正そうと努力しています。

今日、その経済システムの如何にかかわらず、先進国、発展途上国双方とも家族の価値観、精神的価値観の喪失という同じ問題に直面しています。全ての家庭はそれぞれの問題を抱えており、全ての問題は小さないさかいから生じています。小さないさかいが大きな争いとなり、最後には悲劇をもたらしています。夫婦間の争いは家族の崩壊を招き、子供の退学や薬物中毒、そして国によっては子供の売春という結果を招きます。民族、人種間の争いは、旧ユーゴのボスニアやクロアチアのように国家を内戦に導きます。国家間の争いは世界戦争につながります。復讐は決して前向きな解決法ではなく、さらなる争いや戦争を招く最悪の選択です。全ての鍵は相互信頼と相互理解の達成にあります。民主主義とは決して輸入されるものではなく、人々の中に根ざし、人々によって、人々のために創造されるものなのです」。

小田原国際ダイアローグ

一夜開けた十月九日、朝食後、三つのグループに分かれて『日本をこう変えたい――私の日本改革のアイデア』というテーマで、一回目の分科会が行われ、それぞれ活発な対話が行われました。

昼食後、小田原国際ダイアローグ『平和の受益者から平和の創造者へ』（主催：国際MRA日本協会、アジアセンターODAWARA、総合研究開発機構後援：松下政経塾、東京フォーラム、竹の会、ジャパン・タイムズ）が開催されました。地元小田原の企業五十二社の協賛も得て行われたこのダイアローグは、「アジアの和平と信頼作りにつくすため――信頼醸成、和解、予防外交の推進を目指して」というサブタイトルが付けられ、サム・レンシー（大蔵大臣、カンボジア）、劉仁州（全国選挙浄化推進委員会委員長、台湾）、渋

●会議の合間のリラックスタイム

沢雅英（アジアセンターODAWARA代表）の三氏が第一部のプレゼンテーションを行い、第二部のパネルディスカッションに、青木一能（日本大学国際関係学部教授）、そして相馬雪香の二氏が加わるという形式で進行しました。（注：加藤シヅエさんは都合により不参加）三時間にわたって活発な議論が続きましたが、その中からサム・レンシー氏と渋沢雅英氏の発言（要旨）をご紹介します。

●サム・レンシー氏（カンボジア）

サム・レンシー（大蔵大臣、カンボジア）

「今日のテーマを踏まえて、私自身の経験をお話します。カンボジアは国際社会から多くのものを与えていただいたお蔭で、平和と民主主義を取り戻すことが出来ました。しかし、そこに至るまでカンボジアは様々な苦難の道を経験しなければなりませんでした。75年から78年にかけて、カンボジアでは未曾有の大虐殺が行われました。700～800万の人口の内、100～200万人が殺されるという、第二次大戦後、最大規模の大量殺りくでした。79年に起こった中越紛争は、共産主義陣営内部の亀裂をあらわにしました。国連はカンボジアで91年から、二十億ドルという巨額な費用をかけた史上最大規模の平和維持活動に着手し、軍民合わせて2万人もの人員がカンボジアに派遣されました。92年から93年にかけて、日本は戦後初めて、自衛隊と文民警察を海外に派遣しました。それは戦いのためではなく、平和を確立するための様々な活動のためでした。その過程でカンボジアで貴[illegible]を犠牲にされた日本の方々に心より感謝の意を表したいと思います。カンボジア人民はこの方々のことを決して忘れません。

和平の確立と共に、カンボジアの経済復興に向けた国際的な支援が始められ、『カンボジア復興国際会議』が日仏が共同議長を務めて始められました。カンボジアは世界、特に日本から多くのものを与えていただきました。それに対してカンボジアは世界の平和のためにどの様に貢献していけるでしょうか。カンボジアは自らの経験を生かして、これからは世界のどの国であっても、苦しんでいる人々がそこにいれば、そしてその国の和平を実現しようとしている人々がそこにいれば、お手伝いをさせていただくつもりです。アジアに信頼と平和を実現するために、どの様に協力していけるでしょうか。和平の実現のためには闘いが必要ですが、そこに憎しみがあってはなりません。憎しみの心を持ったまま平和をかちとることは出来ず、事態はより悪化するでしょう。自らに正すべ

●台湾の劉仁州氏（右）と中国の馬照富氏の息の合った合唱

●日本人の応援を得て文化の夕べで歌を披露するミャンマー人参加者たち

き点があれば正し、進むべき道を示して人々を変えるべきであり、殺してはなりません。正義のための闘いを決して個人的な感情で捉えてはいけません。これまで長年にわたり、カンボジアを銃と金の力が支配してきました。今こそ法の力、支配がカンボジアに必要です。力や金に頼る人々は私を嫌っていますが、彼らの心の奥底に、必ず私の主張に対して賛同してくれている部分があることを信じています。私の方で心に憎しみがなければ恐れることは何もありません。憎しみから解放された時、和解への確信が生まれます」。

渋沢雅英（アジアセンターODAWARA代表）

「最近ワシントンで非常に興味深い本が刊行されました。表題は「Religion, the Missing Dimension of Statecraft」（宗教・国際関係における忘れられた要素）とでも訳すべきでしょうか。版元はオックスフォード大学出版部、編集者の一人であるダグラス・ジョンストンは、国務省の政策研究機関として有名な戦略国際問題研究所（CSIS）の副理事長兼業務部長として活躍しています。

CSISは七年ほど前から「宗教と紛争解決に関する研究」を続けてきましたが、ジョンストンはその過程で、国際紛争の現場では民間の主導による精神的、あるいは宗教的な活動が行われることが多く、しかもそれがしばしば大きな効果を上げてきた事実を認識するようになりました。そこで戦後の国際紛争の解決に寄与した民間の業績を掘り起こし、記録にとどめ、結果を分析するという作業を開始しました。十二名の専門家の協力のもとに、七件の国際紛争について詳細なケーススタディが行われた結果が、上記の書物となったわけです。

（中略）

MRAの活動については最後の独仏の和解と、ジンバブエ独立の際に果たした役割が特に強調されています。終戦直後のフランスでは、戦争中のドイツの暴行への憎悪と怨恨が深く浸透しており、報復は話題となっても、共存や協力は口にすることもはばかられる状態が続いていました。本来なら両国に巨大な組織と多数の信者を抱えているカトリック、新教各派などキリスト教会がイニシアチブを取ることが期待されましたが、これらの既成教団は戦争中、ドイツでナチス政権、フランスでは親独政権との妥協を続けてきたため本来の道義的な権威と信憑性を失っていました。

そしてその間隙を埋めるような形で、組織もなく資金も持たないMRAが、戦前から各国で培った人脈だけを頼に独創的

●渋沢雅英氏（右端）

入会のご案内

(1)正会員　個人　年額　6、000円
　　法人　年額　50、000円

(2)賛助会員　個人　年額　3、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
東京八－三八二八九
口座名　社団法人
国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やシンポジウムなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌－MAJニュース、月刊ワールドレター等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

●世界家族の仲間入り
●信頼できる人との出合い
●新時代に必要な情報
●心身の健康
●問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度一口50、000円（寄付扱い・年額）を設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号
東京五－四一三六六五
口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

な活動を展開し、誰も予想しなかったような大きな成果を上げることになったのです。それは独仏両国をはじめとしてヨーロッパ再建の鍵となるような人物多数を、スイスのコーのセンターに招き、静かな雰囲気の中で内省と対話の場を提供することから始めました。アルプスを見渡し、眼下に湖水を望むこのセンターは、一九四六年にスイス人のグループが多大の犠牲を払って手に入れたものでした。

当時のドイツは連合国の分割占領下にあったので、MRAは西側三ヵ国の占領当局を相手に粘り強い交渉を続けてドイツ人の出国許可を取りつけなければなりませんでした。こうして五年の間にコーを訪れた両国の指導者は計千五百四十一人、政治家や官僚百五十人、組合指導者六百人、財界人四百十七人、聖職者四十九人、メディア関係者百九十人、教育者百三十五人という大規模なものとなりました。戦後初めてのこうした集団的接触の中から独仏両国の人々のあいだに生まれた深い反省や謝罪を基盤として欧州石炭鉄鋼共同体など、ヨーロッパの将来を見通した独仏協力の構想が浮上しました。それがやがて欧州経済共同体や欧州連合など戦後欧州の政治経済の基盤につながったことは広く知られています。本の筆者はまた、この時点での独仏の和解が、西独を西側陣営につなぎ止めておくための貴重な効果を上げたことを指摘しています。もし独仏の離反が長期間放置されていたら、西独がソ連の誘いに乗って中立に傾斜する可能性が大きかったし、そうなれば冷戦の枠組みそのものが変わっていたかも知れません。こうした事情を踏まえて、自らコーを訪れた経験のあるフランスのシューマン外相と西独のアデナウアー首相は、独仏和解に関するMRAの業績を、口を揃えて絶賛しています。

（中略）

この本では取り上げられていませんが、MRAは日本にも大きな足跡を残しています。ドイツに対するのと同じパターンで占領軍の特別の合意を取りつけ、片山首相をはじめ多数の政治家や財界人、革新系の組合指導者

MRAビデオのご案内

日本語吹替版

明日を愛するがゆえに

——イレーヌ・ロー夫人の生涯——

頒価 5,000円
（郵送料サービス）

ドイツを仲間外れにして
ヨーロッパの再建ができますか？

独仏の歴史的和解は勇気ある
人々により始められ後のEC
設立の礎となった。

好評頒布中！

●イレーヌ・ロー

1898年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人そして母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。戦後間もなくスイスのMRA世界大会に参加したが、ドイツ人がいるのを見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうしてヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ドイツ人を許し憎しみを謝罪した。その後、独仏間の関係改善に尽力し、後のEC設立のきっかけを作った。マルセーユ選出の国会議員や仏社会党中央執行委員等も務め、世界各国を訪れ融和を説いた。1987年、88歳で没する。

お申し込みは
MRA事務局へ 03(3821)3737

や広島・長崎の知事や市長など多様な背景を持つ人々が、コー及びアメリカのマキノで開かれたMRAの国際集会に招かれました。それは戦後日本人が個人の資格で初めて外部世界と接触したという意味で文化的な意義も大きかったのです。

五〇年代には、MRAを経験して帰国した人々の努力によって、東芝、石川島等、困難な労使紛争の解決が促進されました。また保革対決の決戦場といわれた三池炭坑の争議に際して、MRAは過去に同様の経験を持つドイツのルール地方の炭坑労働者のグループを招いて、労使対話のきっかけを作るべく努力を傾けました。こうした経緯を通して培われた対話の芽が、やがて六〇年安保の時点で国政の危機回避を助けることとなりました。

日米安保条約改定反対の運動が最高潮に達した六〇年春、東京のMRAハウスは対立する保革両陣営の指導者たちが会合し、本音で話合いのできる数少ない場所として、昼夜を分かたず活動を続けていました。国会は連日赤旗に取り囲まれ、六月十五日には一人の女子大生が死亡するという痛ましい事件が起きました。国会内の対立は頂点に達し、戦後の民主主義体制の基盤そのものが脅かされ、日米関係の先行きも不透明となりました。

六月十七日、社会党参議院議員加藤シヅエ氏が、MRAによって触発された良心と信念に基づき、「勇気を持って立ち上がろう」と題して、朝日新聞を初め全国の主要新聞に公開書簡を発表しました。加藤議員は、自分が所属する社会党が間違った方向に動いてゆくのに対して、「自分の臆病さのゆえに……心に正しいと思ったことをはっきりと表現せず」、結果として国の存亡の危機を招くに至った経緯を正直に告白し、個人的に「陳謝」したうえで、心情を吐露して国民に訴えました。

「安保条約改定の当否、岸首相個人のとった処置の可否などは、すでに問題の焦点をはるかに離れてしまっている。真の問題は、いったいわれわれは、われわれ自身の[redacted]に、また子供たちのために、どのようなイデオロギーのもとに日本をつくろうとしているのかである。日本は、米国に追随すべき国ではないことは、もちろんである。しかし、同時に、中共やソ連の圧力によって支配されるべき国でもない……もし、われわれがいま、勇気をもって立ち上がり、心に思っている真実をはっきりと口にし戦う決意をするならば、まだわれわれは、日本及びアジアを救うことができると、信ずるものである」。

自らの政治生命をかけた加藤議員の発言は、日を追って危険な様相を深めていく対立に不安を感じていた国民の心の琴線に触れ、何百万の市民が、今こそ良識に戻る必要を直感しました。それは保革対立に揺れた五〇年代の政治の流れを変える契機となり、六〇年代の高度成長を支える国民的協力の予兆ともなりました。社会党は党議に違反したとして加藤議員の懲罰を計画しましたが、世論の支持の大きさを見て実行に至りませんでした。

こうした経緯は[redacted]ゆる正史に記録されることなく、時とともに人々の記憶からも消え去ろうとしています。MRAに限らず、宗教的精神的な体験に基づく行動は、個人的な色彩が強いため、一般的な記録になじまない面があることは否定できません。また国家や企業のような組織の裏付けのない活動は、継続性を保つことが困難で、とかく一過性の現象という印象を与えることも事実です。しかし紛争も人間の営みである以上、精神的な要素が大勢を大きく変える場合が多いことも事実です。

冷戦終結後、人種や宗教の対立を基盤とする紛争が世界中で頻発しており、精神的活動の出番はさらに増えるに違いありません。しかも最近では問題の多くが国家という枠組みを越えており、国益を基盤とする政府間外交は手詰りに陥る可能性が大きいのです。また局地的な対立抗争を越えて、「文明の衝突」を憂慮する声もあります。歴史的にも前例の少ないそうした大型の紛争に対しては、これまで慣れ親しんできた近代世界の常識を越えた考え方や、新しいアプ

ローチが必要となるでしょう。そういう点からも、現在の時点でこの本が刊行されたことの意義は極めて大きいと考えます。国際関係における精神性の復権がさらに進展し、過度の物質主義的偏向が是正され、すべての問題について、ありのままの人間の心が反映されるような、新しい世界の到来を期待したいものです」。

文化の夕べで広がった国際交流の輪

次に、やむを得ぬ事情で参加されなかった加藤シヅエさんのビデオメッセージが流された後、青木一能教授と相馬雪香さんがパネリストとして加わり、活発な議論が繰り広げられました。フロアーとの質疑応答の後、総合研究開発機構の平井照水企画業務室主査により閉会の辞が述べられ、ダイアローグを無事終了しました。

夕食後は恒例の文化の夕べが行われ、参加者の大学生太田敦之さんや通訳の翠川美智子さんも進行に一役かっていただき、お国自慢の踊りや歌が披露され、国際交流の和やかな輪が広がる楽しい夕べとなりました。

翌十日の午後、今回の会議を締めくくる全体会議が開かれ、前夜来日されたレンシー氏夫人のサム・ソムラ女史（カンボジア国立銀行副総裁）や松下政経塾の堀本崇氏、またカンボジア難民で現在は日本に帰化した比井智恵（ノンブンチャン）さん他より貴重なお話をうかがい、三日間にわたった小田原国際会議を終えました。

憲政記念館で東京国際ダイアローグ開催

十二日には東京の憲政記念館で、東京国際ダイアローグ「日本の改革、政治浄化と国民の責任――日本に主権者（ピープル・パワー）は存在するか？　愛され、信頼され、世界と共に歩む日本」（主催：尾崎行雄記念財団、日本の政治改革を考える会、国際ＭＲＡ日本協会　後援：総合研究開発機構、松下政経塾、東京フォーラム、竹の会、ジャパン・タイムズ）が開催され、サム・レンシー氏、劉仁州氏、賀来龍三郎キヤノン会長、福岡政行白鷗大学教授、加藤シヅエ氏（元国会議員）。そして相馬雪香氏の六名のパネリストによるディスカッションが行われました。

十五日から十六日まで神戸の住友金属工業住吉研修所で行われた第十七回ＭＲＡ関西秋季大会には、ハニング氏、劉氏が引き続いて参加し、途中から合流した台湾の王旭光・魏晴秋夫妻も参加しました。

この他にも、箱根見学、浦和プログラム、京都見学、アジア・太平洋青年会議日本人参加者との懇談等、多彩なプログラムを終え、海外からのゲストはそれぞれ帰国の途に就きました。今回のキャンペーンを成功の内に終えることができましたのも、多くの方々のご協力の賜と心より感謝申し上げます。（終）

●東京国際ダイアローグで司会する福岡政行教授

●東京ダイアローグで発言する加藤シヅエさん（中）。右隣はレンシー氏夫人のサム・ソムラ女史（カンボジア国立銀行副総裁）

シリーズ「アジアを知る」——①

タイ・カンボジア

東南アジアの体験から

「東南アジア通信」編集長
五十嵐　勉

●サンローチャガンのカンボジア難民の子供たち（1984年）

●この記事は平成6年5月例会での講演に加筆・修正を加えたものです。

五十嵐　勉（いがらし・つとむ）

1949年山梨県生まれ。45歳。74年早稲田大学文学部文芸科卒業。79年「流謫の島」で講談社「群像」新人長編小説賞受賞。84年タイに渡る。タイ・カンボジア国境を中心に取材。僧経験・タマサト大学日本語講師などを務めながら、東北タイ、山岳民族、また東南アジア諸国を広範に取材。87年「東南アジア通信」を創刊。91年帰国。93年アジア文化社創設。アジアイベント情報誌「アジアウェーブ」を創刊。現在「東南アジア通信」編集長。「アジアウェーブ」発行人。

タイ・カンボジア国境での運命的な事件

私は「東南アジア通信」という季刊誌を出版しています。これは私の東南アジアでの体験の中から生まれた雑誌です。私は八四年から九〇年までタイに滞在していました。

前半は、私がなぜタイに行き、何をしてきたか、どのようにして「東南アジア通信」を作ったか、それらを中心にお話ししたいと思います。後半は、私はもともとカンボジア問題で向こうに行きましたので、そのカンボジアの問題を中心にお話しさせていただきたいと思います。

私は、『群像』の小説新人賞を受けてから暫く低迷していた時期があったのですが、その時に私の心の中にあったのは、戦争に対する疑問でした。

私は昭和二十四年生まれですので、父母の世代が太平洋戦争を体験しています。戦争の話を折に触れ聞かされて育ちました。何かことがある度に、空襲で盆地の底が地獄の釜のように燃え上がった話ですとか、その焼死体が水門のところに沢山引っ掛かって水の流れが少なくなったとか、そういう話が沢山出てくるんですね。

母の兄も中国で戦死しています。その兄が学費を出してくれたお陰で母は高等小学校に行けたそうですが、兄が既に中国で戦死していたことも知らずに、千人針にキャラメルなどを包んでひたすら半年ほど送り続けた話など、よくしてくれました。

私も物心がついてから歴史の本をいろいろと読んでみました。すると小指を切り落として遺骨の箱に入れて内地の遺族に送り届けた話とかすごい話が一杯出てくるんですね。どうしてこんな凄まじいことがあるんだろう

かと思いました。原爆の話もそうですが、何故このように沢山の人々が犠牲にならなくてはいけなかったのか、そんな思いがいつも頭の中にありました。

そんな時たまたま新宿の書店で、タイ・カンボジア国境での取材をまとめた写真集を直販していたあるフリーカメラマンと出会いました。彼と色々な話をしました。虐殺は本当にあったのかとか、色々とカンボジアのことを聞いているうちに話が非常に合いまして、それで、一度現地へ行ってみないかということになったわけです。私も危険なことは承知していましたが、一度自分の目でその戦場というのを見てみたいということで、思い切って八二年の春にタイ・カンボジア国境に行きました。

そこでベトナム軍の砲弾一発で十七人が死亡する事件に遭遇して、悲惨な現場を見てしまったわけです。

そこで私が写真をばちばち撮っていましたら、一人の少年が私に近づいてきて、私の袖を一生懸命引っ張るのです。私は当然クメール語が分かりませんので、彼何を言っているのか分かりませんでした。彼は、「こっちへ来い、こっちへ来い」と言うように草むらを指差すんですね。何のことか分からないまま彼についていくと、ビニール袋の中に何やら黄色いどろどろしたものが見えました。一体あれは何だろうと見ていましたら、その少年が自分の頭を指差すのです。それでやっと分かったんですが、砲撃で死んだ赤ん坊の脳みそだったんです。誰かが赤ん坊の頭から流れ出た脳みそをビニール袋に入れて草むらに捨てたんですね。そのことを私に一生懸命伝えようとした少年の目が今でもはっきり、私の中に残っています。非常にショッキングなものを見せられまして、「これは誰が行ってもそういう場面を見られるものではない、やはり何かの縁だろう」と思いました。私自身戦争に興味がありましたし、カンボジアの虐殺とか歴史の大きな問題に本格的に取り組もうと、その後もタイに行く機会を窺っていました。その時はそこだけでなく、東北タイや北タイにも行きました。チェンマイよりさらに北に山岳民族がいて、顔は日本人そっくりなのに、着ているものが全く違うんですね。部族ごとに着ているものが違うという不思議な世界を見ましたし、東北タイで夕焼けの中を水牛がカランカランと鈴を鳴らしながら戻ってくる、素晴らしく美しい風景も見ました。

タイには南北問題、農村問題、少数民族問題、あるいは華僑だとかクーデーターなど色々な問題があります。カンボジアも含めて物書きにとっては宝の山みたいな気がしたんですね。それで、思い切ってもっと長期にタイに行こうと思いました。

東北タイで僧侶の生活を体験する

八三年に、ポルポト派の基地に入れる機会があったものですから、その時バンコクで、朝日新聞の助手をしている瀬戸さんという方に相談したところ、「うちに居候にきてもいいよ」ということでしたので、これは千載一遇のチャンスだと思いました。瀬戸さん自身が素晴らしい人脈を持っている上、ジャーナリズムの勉強もできます。これを逃したらチャンスは二度とめぐって来ないだろうと、八四年に自分の仕事をたたんでタイに飛びました。初めは一年位で帰ってくるつもりだったんですが、段々と面白くなってきまして、一年が二年、二年が三年、三年が四年となっていきました。

最初の一年はタイ・カンボジア国境を中心に取材していました。タイ軍の許可がないと国境付近には行けません。許可が出ても長くて一、二週間しかいられませんので、次に行くまでの間を利用して東北タイにも行きました。東北タイは農村地帯ですが、一ヵ月ほど泊まり込みました。僧侶の生活も体験しました。その生活の中では、タイ社会の最もよい面を見せてもらいました。お経なんかほとんど唱えられない私のような外国人の僧侶でも、非常に快く受け入れてくれるんですね。夜明け前の空が暗いうちに起きて岩山で座禅をしてから、山寺を下りて村へ食物をもらいに行きます。夜明けの朝の空気の中を裸足で下

りていくと、村人が跪いて合掌しながら、お鉢の中に食物を入れてくれます。もらったご飯も温かでしたが、村人たちの温かい心も忘れることができません。

僧侶の体験は「東南アジア通信」の出版を始める上でも、現在の私が東南アジアを考える上でも非常に重要な核になっていると思います。あの温かなもてなしに対するお返しとして私にできることは何かと考えていました。自分にできることはやはり「書く」ことしかありません。そういうことから「東南アジア通信」をやり、また今後も小説を書いていこうと思っています。

東南アジア通信の誕生

東北タイでの僧侶の体験は、自分自身が真っ裸になっている感じでした。朝、昼、晩と座禅をするんですが、夜は星が降ってくるような満天の星です。その下で物思いに耽るといいますか、じっと時の移ろいの中に自分をさらすわけです。朝三時半に起きて、眠る前と同じ場所で座禅を組むと、眠る前は右手にあったオリオン座が左に大きく巡っているのが見え、宇宙の巡りといいますかとんでもなく大きなものの中に自分の命が浮かんでいるという感動を覚えました。朝、座禅をやっていると少しずつ空が白み始め、太陽が昇る直前に一斉にセミが地から湧き上がるような凄い音で鳴き出すんですね。それがピタッと止むと、太陽の光が地平線の向こうから差し込んできます。途方もなく大きなものの巡りというのを私は東北タイでの僧侶生活の中で味わうことができました。ですから余計にタイのいい部分、東南アジアの素晴らしい部分を伝えたいという思いを自分の中に強く持ちました。

二年目になりますと、個人的にタイの人々とつながってみたいと思いました。そこでタマサート大学で日本語を教えることになったんですが、自分が教えること、伝えたいこと、情熱がどれくらいタイの人々に伝わるものなのか、ただ単に風景や人との簡単な交流から受ける感動だけでなく、人間と人間の関係の中かもかめるものはないだろうかと思い、日本語教師をしてみたわけです。かなり強引なところもありましたが、文集を作ったり、スピーチコンテストの練習に一生懸命になったりしました。厳しく教えたりしましたが、今でも教え子から手紙や電話を貰ったりしていますので、私の試みも全く無意味ではなかったと思っています。

しかし、三年目に体調を崩してしまいました。過労と油っこいタイ料理が重なってスイ臓を悪くして、暫らく寝込みながら「これでタイともお別れだな」と考えました。そして、アンコールワットを見る機会がありましたので、それを見納めにして帰ろうと思った時に、何か残すものを作ってみました。東南アジア滞在の記念として、いたずら半分に作ってみたわけです。こんなものがあったらいいなと夢を見て、タイトルを「東南アジア通信」としました。ところが、周りのジャーナリストから「これは面白いからもっと続けろ。写真ならただであげる」とけしかけられ、私も単純なものですから、そこまで言われるのならと、「東南アジア通信」を本格的に始めることにしました。

「日本はこれだけ文化国家と言いながら、未だに東南アジアの情報をしっかり伝える雑誌がない。これで何が日本の文化と誇れるのか。日本の文化などといってもこの程度のものか」と傲慢にも思いました。そういう腹立ちも動機の一つでした。私はマスメディアの力がどれくらい大きいのかよく分かりませんが、微力でもいいから誰かがアジアを伝えようとしてもいいのではないか、そして、それがきっかけとなってアジアを知ろうとする動きが日本の中にも出てくればよいと思いました。

そういうことで強引に、かつ、かなり無謀に「東南アジア通信」を始めたわけです。雑誌作りの大変さがその時分かっていれば、多分始めなかったと思いますが、とにかく始めてしまいました。編集の経験などほとんどなかったのですが、見よう見真似で色々なことを勉強しながら、何とかここまできました。また、ワープロだとかコンピューターだとか発達し始めた時期も幸いした

と思いますが、それらがなければおそらくバンコクでこういうものはできなかったと思います。「東南アジア通信」の編集をすることによって、私自身の視野も大きくなりましたが、むしろ「東南アジア通信」に育てられたと言えると思います。ビルマの学生と付き合ったり、日本企業に取材に行ったり、またODAにも目が開かれました。他にも、タイ・ビルマ国境で追い詰められた状況下にあるカレン族の闘いも知りました。それから、チェンマイ付近で日本軍の残留兵でビルマ戦線の中で山野に死んでいった人々の遺骨を収集している人がいます。その人を通して、全く別の面から日本の戦争に対する厳しい声を聞かされたりしました。実に様々な声を「東南アジア通信」を通じて取材することができました。

ボランティアに支えられて

そのうち、日本の母の具合が悪くなりまして、私は長男ですので、自分の活動の場を変えなくてはならなくなりました。私

レポート　国連PKOシンポジウムで、MRAの紛争解決の役割を発表

「国連平和維持活動の新局面」東京シンポジウムは、国連大学と国際平和アカデミーの共催、外務省の後援で1月19日と20日に国連大学本部で開催された。国連50周年関連行事の幕開けとなったこのシンポジウムは、岐路に立つ国連平和維持活動（PKO）の抜本的な見直しと国連の紛争処理機能の可能性を探るという目的で開催された。PKO生みの親と言われるブライアン・アークハート元国連事務次長、オララ・オトゥーヌー国際平和アカデミー会長（元ウガンダ外相）、ジョン・サンダーソン元国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）司令官、李肇星中国国連大使、明石康旧ユーゴスラビア国連事務総長特別代表、小和田恒国連大使などが参加した。

●左から二人目が当協会藤田専務理事

冷戦後「国連のルネッサンス」（アークハート元国連事務次長）と期待を集めた国連は、1992年にそのPKO機能強化を目指した「平和への課題」をガリ事務総長が提案した。しかし、ソマリアなどでの平和執行部隊の展開の失敗に伴い、その修正を迫られた「増補」が1月初めに発表されたばかりである。

今回のシンポジウムでは、2年間で様変わりしたPKO活動の課題を「予防外交」、「地域紛争における武力行使」、「紛争下における人道的緊急援助」、「国内避難民」、「紛争終息後の平和プロセス」、「平和創造、平和維持、平和構築努力における日本の役割」といった具体的テーマで討論した。

「平和プロセスでの非政府機関（NGO）の役割」というセッションでは、功刀達郎国際基督教大学教授、フランソワ・ジャン「国境なき医師団」メンバー、そして国際MRA日本協会の藤田幸久専務理事が発表を行った。藤田専務理事は、第二次世界大戦後の独仏和解、ジンバブエの円満独立、日本の国際社会への復帰、アジアとの信頼醸成、経済戦争における対話の推進等に果たしたMRAの役割を紹介した。そして、これらが成果を挙げた理由として、以下のような紛争解決にNGOが果たすべき役割の特徴を挙げた。1、当事者間の謝罪と許しといった心や姿勢の変化が和平の糸口をもたらした。2、手柄や結果を求めず黒子に徹した仲介と、政治的目的を求めず道徳的義務感で活動するNGOとしての資質が当事者双方からの信頼を得た。3、民族・宗教間の紛争解決に欠かせない紛争当事者の内面的要因やアイデンティティーを尊重した。

そして予防外交を病気の予防医療に例えるなら、経済格差といった肉体的病因の対応に加えて、憎しみ、敵対意識、被害者意識といった精神的病因を癒すことが重要であることを強調すると共に、ブトロス・ガリ事務総長の提唱した「平和への課題」が「和解への課題」と「癒しへの課題」を伴う必要があることを提唱した。

はもともと小説を書きたくてタイに行ったのですが、「東南アジア通信」の仕事に忙殺されて、小説の方がおろそかになっていました。「これでは自分の道からそれていっているんじゃないか。もし本当に自分の初志を貫くのなら、やはり日本へ帰って日本の読者に読んでもらうべきだ」と思いまして、九〇年の暮れに日本に帰ってきました。

帰国した時点で「東南アジア通信」を終了するつもりだったのですが、帰国した時に、ラオス特集号を読んだ日本在住の難民から手紙をもらいました。ラオスは日本のマスコミにはほとんど取り上げられない、情報においてはいわば真空地帯のような国ですが、「東南アジア通信」でラオスを取り上げたことに対して非常に丁寧な感謝の手紙をいただきました。それを読みながら色々と考えました。言葉が分からなくても、ラオスにもカンボジアにもビルマにも、間接的に応援してくれる人がいるんだなと思いました。

そこで経済的には色々と困難がありましたが、気持ちを取り直して「東南アジア通信」を続けることにしました。今後、どうなっていくか全く見当がつきませんが、続ければ続ける程大きな壁にぶつかるような気もします。今、日本を支配しているマスコミの壁がどれくらいすごいものなのか、私にも実感として分かってきました。しかし、もう後戻りはできませんので、一歩一歩自分にできることを進めていきたいと思っています。

しかし、やはり季刊誌ですのでタイムリーに情報を送ることができません。とりあえずこの点は月刊のニュースレターの「アジア・ウェーブ」で補うことにしています。幸い、ボランティアとして多くの方が手伝ってくれていますが、そうした支えと共に、非常によい方向に向かっていると思います。

カンボジア問題への関わり

さて、次にもう一つの私自身の大きな問題であるカンボジア問題について話させていただきたいと思います。七九年から八三年くらいまで、タイ国境に流出したカンボジア難民のことをマスコミが大きく取り上げ、カンボジアに注目が集まったというのが、第一次のカンボジア報道の構図だと思います。その後カンボジアの和平が進み、国連主導による選挙が行なわれた時、カンボジアが再びマスコミに取り上げられ、茶の間の大きな話題になりました。しかしながら日本のマスコミは非常に浮気な部分がありまして、一時のブームが去るとほとんど報道されなくなるため、なかなかそのつながりというか問題の質というものが省みられない傾向があります。

八四年頃、私がタイ・カンボジア国境で取材している時、難民キャンプに新たな難民が到着しました。たった今カンボジアから国境を越えて逃げ出してきた難民たちの登録が行われていました。そこにいた五十人位の難民たちにとりあえずの調査を試みました。

「ポル・ポト軍に家族が殺された人は手を挙げて下さい」と言うと、ほとんど全員が手を挙げました。「ベトナム軍に家族を殺

●地雷で足を失ったカンボジア難民（カオイダン・1984年）

された人は手を挙げて下さい」と言うと、手を挙げたのは十人くらいでした。もちろんただ単にこのことだけで全体を推し量ることは危険ですが、大体あれがカンボジアの当時の実状に近かったのではないかと今でも思っています。

カンボジア最大の悲劇

カンボジアの最大の悲劇は、ポル・ポトがあの国を支配してしまったということだと思います。七九年四月十七日、プノンペンは陥落してクメール・ルージュの手に落ちます。その時から非常に極端なことをやっていったわけです。先ず都市の住民を全部強制的に追い立てて、農村に連れていきました。それがどのくらい極端なことか、私たちの生活に置き換えてみれば分かると思いますが、例えば新宿区の住民を全部銃で追い立てて、山梨だとか長野だとか、そういう所へ徒歩で行かせて農作業をさせたらどうなるか、ということですね。貨幣はもちろん全部廃止、女性の長髪も全て禁止です、眠[illegible]所も全部一緒の集団生活で、中に米粒が幾つか入っている程度のお粥、ごく希に肉が出る程度で一年も二年も働かせられるというのは、どれ程苛酷な生活であるかということを想像していただきたいと思います。日本人でしたら、支配者をやっつけるとか、反乱を起こすとか当然色々なことを考えるでしょうが、カンボジア人たちはそういうことは経験したことがなかったのです。当時百万から二百万人が虐殺されたと言われていますが、四分の一くらいは農村に連れていかれた初期の段階で、前の政府側の関係者や兵士だったということで殺されたケースが多いと思います。それから半分くらいは、苛酷な労働の中で栄養失調、あるいはマラリヤとか破傷風で病死した人たちが相当いると思います。その殺し方は、針金で手を縛って首を切って殺したり、竹や鉄棒で後頭部を殴ってそのまま穴の中に蹴落としたりするひどいものでした。カンボジアではお寺が生活の中心であり、それによって人々の生活が成り立っていたわけです。特に農[illegible]は、お寺を中心に基本的な信仰の世界がきちんと出来ていたんですが、そのお寺を虐殺の場にしたり、お坊さんを役に立たないということで殺してしまったり、もう普通の状態では考えられないことをしたわけです。その先兵になったのが少年たちでした。農村でちょっと頭のよさそうな少年をリクルートしてきて、政治局員が徹底的な洗脳教育をするのです。特にキュウ・サンファンは元高校教師でしたので、少年たちを教育して殺人兵器にするといったようなことは、やはりある程度得意だったのではないかという気がします。連れてこられた少年たちは裸足のわけですが、彼らに「お前はなぜ裸足なんだ」と聞きます。「街ではあんなに車が走っているが、なぜお前たちは車に無縁なんだ」、「お前たちが作った米はどういう風に使われるんだ」とか、色々な質問を浴びせかけながら、都市の住民たちや政府の指導者たちがいかに悪いかということを徹底的に叩き込んで、少年たちを一種の殺人兵器のようなもの

●食料の配給に集まった難民たち（サイト２）

●ベトナム軍の急襲を逃れてきたサンローチャガンのカンボジア難民（1984年５月）

に仕立てていきます。シアヌークの回顧録にも書いてありますが、ねずみに火をつけて焼き殺したり、どれくらい残酷な殺し方ができるかということを競い合わせたりしながら、少年たちに非常におぞましい殺し方を教え込んでいきました。その少年たちが銃を持って監視しながら村を支配するという、何ともおぞましい時代が七五年から七八年まで続いたわけで、カンボジアの最も残酷な時代だったと思います。

ポル・ポト政権倒される

さて、見るに見かねてということもあったでしょうし、安全保障という問題もあったのでしょうが、ベトナムに逃れていったカンボジア人たちとベトナム軍が、七八年十二月二十五日にカンボジアに侵攻しました。私はベトナムの侵略ということに関してははっきり糾弾しなければならないと思いますが、結果的にポル・ポト政権は倒れ、沢山の難民が一挙にタイ国境に逃れてきました。何十万人という数の難民があふれ出し、難民村や難民キャンプが作られていきました。最初は国連が待っていたわけでもなく、タイ軍によって地雷源に追い返されたりしました。食物も持たずに着の身着のままで出てきましたから、国境に着くや否や、そのまま死んでいく難民たちも非常に多かったと聞きます。その悲惨な様子がマスコミによって伝えられ、国連などが動いてノンチャン、ノンサメットなどに難民村が作られ、また第三国定住希望者を集めてカオイダン難民キャンプも作られ、やっと食料配給とかの国連援助が軌道に乗りました。私は八二年に現地に行きましたが、その頃でもまだポル・ポト軍を追うベトナム軍がその辺りで戦闘していたり、タイ軍と戦争していたりして、それらの犠牲になった難民もいました。ベトナム軍の砲弾だけではなく、タイ軍の砲弾や地雷によって亡くなった難民も沢山います。戦争というものはそういうものなのでしょうが、無念の思いで、あるいは何も考える暇もなく虫けらのように死んでいった人たちも沢山いたと思います。

国連による選挙

八二年六月、シアヌーク派、ソン・サン派、それからポル・ポト派の三派が連合して、反ベトナム三派連合が出来ました。それを中心にベトナムとの和平交渉が進んでいったわけですが、私が現地で見ていて、もう和平は実現しないのではないかと絶望的になるほどその交渉は進展しませんでした。しかし、インドネシアやパリで和平会議が行われたり、またソ連崩壊による影響が非常に大きかったと思いますが、その後少しずつ和平への気運が高まっていき、とうとうUNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）管理下での総選挙が実施され、今日に至っているわけです。総選挙の結果は、シアヌーク派の圧勝に終わったわけですが、当時私は、勝つのはヘン・サムリン政権側ではないかと思っていました。カンボジア人たちもそう思っていたようなんですね。プノンペンのカンボジア人何人かに聞いても、シアヌーク派が二番目、そして

アジア・イベント情報誌
東南アジア通信 月刊ニュースレター
アジアウェーブ
B5版16P　毎月1日発行　1部290円
アジアに親しもう／アジアを知ろう
■お祭り情報■音楽情報■料理講習会情報■講演会・写真展情報■本・雑誌情報■読者のページ■アジアの動きを伝える「アジア短信」
年間定期購読（12号分／送料込）3300円
お申し込み、お問い合わせはアジア文化社
アジアウェーブ　までどうぞ。
TEL 03-5706-7847　FAX 03-5706-7848
アジアのイベント情報をお手元にお届けします！

ソン・サン派とポル・ポト派が最後を分け合う位ではないかというようなことでした。しかし蓋を開けてみたら、シアヌーク派の圧倒的な勝利で、私は非常に驚きました。これは一体どういうことだろうかと考えてみたんですが、やはりカンボジアの人たちは虐殺のことや、自分たちがどれほどひどい目にあったかということをはっきり記憶していたということだったと思いました。

カンボジアの希望の道とは

私はカンボジアの歴史、カンボジアの悲劇を見て、非常に暗澹とした気分になります。歴史というのは前になかなか進んでいかないものではないだろうか、沢山の人々が犠牲になる、ただその集積だけが歴史なのではないかという感じがするんです。太平洋戦争を振り返ってみても、あるいは原爆を落とされた広島とか長崎の人たちを見ても、何か犬死に近いものを感じます。歴史というのはひょっとしたらむしろそういう暗黒なものなのではないのか、そんな気持ちが私のどこかにあるわけです。人間がどんなに理想を掲げて行為を行なおうとも、結局、ある大きな力とか欲望とか、人間の非常に悪い力の前によい方向をたどれないというような、そういうものを強く感じるのです。カンボジアを見ていても、私はそういう思いを払拭できませんでした。これだけ多くの人たちが、嘆き、叫び、訴えだとかを持って犠牲となったにもかかわらず、何も良くならないじゃないかと私は思いました。そんな思いでいたところ、シアヌーク派が勝ったということで、一人ひとりの心の中にあるこういう歴史を二度と繰り返してはいけない、本当にカンボジアがこうあってほしいという思いが反映されたのだと思いました。カンボジアの将来への希望だと思ったのです。

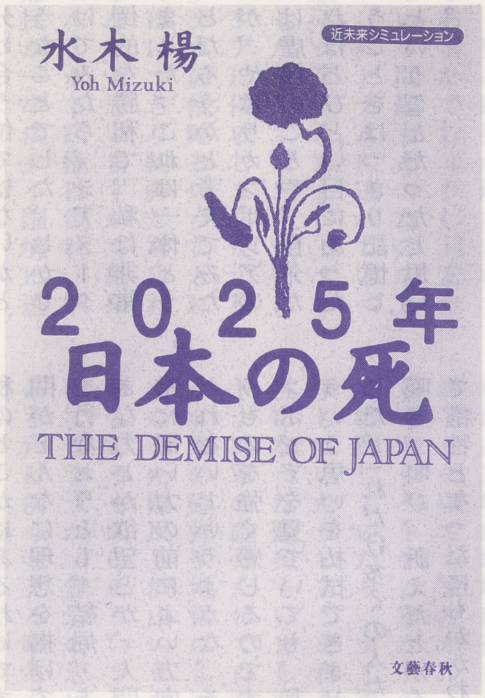
ただ現在のカンボジアは、また暗澹たる状態になっています。政府や軍の高官たちに賄賂が飛び交い、外国企業に政府の建物だとか土地が高額で売られています。治安も悪化していますし、ポル・ポト派との戦闘も激化しています。そんな混乱状態に便乗して、利権にむらがろうとする外国人たちが、日本人も含めて沢山いるわけです。さらに戦闘の激化によってアメリカやオーストラリア、フランスやカナダが武器援助を行なうとか、一層混沌とした状態になりつつあります。こういう状態を見ていると、何かそういう大きな力の前に、またカンボジアは悪い方向に向かっていくのではないか、一体カンボジアの悲劇とは何なんだろうかと思ってしまうのです。カンボジアがなぜこういうことになってしまったのか、もちろんベトナム戦争という大きな戦争があったことが最大の理由だと思いますが、やはり現代の国際政治の歪みがあの国で集約されて出ているのだと思います。東西問題としてもヨーロッパとアジアがちょうどぶつかり合う所ですし、中国文化とインド文化がぶつかり合う所でもあります。現代の世界の政治が持っている矛盾、例えば武器輸出だとか南北問題、そういう矛盾が全部あの国に出てしまっていると思います。私の考えでは、カンボジアは現代の政治の生け贄のようなものです。しかしながら私はカンボジア人の心の中に刻み込まれている、あんな思いは二度としたくない、こんな世界は嫌だという思いの上に、本当の援助というか、希望の道を示すことができるのではないかという思いも捨てておりません。それは同時に、歴史というものに対する私の懐疑への救いの道でもあるような気がします。（了）

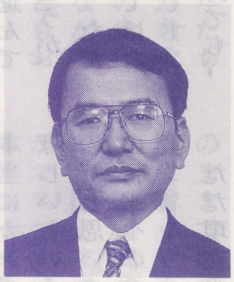
●アンコールワット遺跡

▷MRA月例会シリーズ◁

水木楊の 日本改革論 前半

日本経済新聞社取締役論説主幹
市岡揚一郎





市岡 揚一郎（いちおか・よういちろう）
昭和12年、中国上海市生まれ。自由学園最高学部卒業後、日本経済新聞社入社。ロンドン特派員、ワシントン支局長、外報部長などを経て、現在は取締役論説主幹。水木楊のペンネームで「動乱はわが掌中にあり」、「1999年日本再占領」、「2025年日本の死」などの著作があり、日本の行く末に鋭い警告を発している。

「2025年日本の死」という本について

ご紹介にあずかりました市岡揚一郎でございます。「水木楊の日本改革論」ということで今日、私は水木としてお話ししていいのか、市岡としてお話ししていいのか、どっかなぁと困っている訳です。

「2025年日本の死」という本はどういう発想でやったかというと、2030年にモンゴルの大草原に天幕を張りまして、日本人とモンゴル人のハーフのモンゴル大学教授が、なぜ日本という国が滅びてしまったのかという現代日本滅亡史、衰亡史みたいなものを講義したという形をとっている訳でして、そこに至るまでの、いかにして日本という国が無くなってしまったのかと、無くなったというのは爆破したとか何とかではございませんで、要するに解体してしまったということでして、最初は沖縄が独立しまして、日本が212の幕藩体制当時の共和国に解体、消滅してしまったというストーリーです。ただ、そういう時には、では皇室は一体どうなるんだということに触れずに済ます訳にはいきません。本では皇室は何になったかというと、バチカン公国のようになったということです。

で、なぜ滅びてしまったのかという分析をしている訳ですけど、実はこれを書くにあたって、アメリカがこれからどのような姿、形になっていくだろうか、ということについて三つばかりのストーリーを書いて中国がどのようになっていくだろうか、というストーリーを四つばかり書きまして、日本がどのようになっていくかという選択肢を四つ書いてありますから、合計かけ算をやりますと四十八通り。その中の最悪なものを小説仕立てに、未来ドキュメントにしたらこういう形になるという訳です。ということは、ちょうど写真のネガとポジとの関係のようなもので、これをひっくり返すとポジになる。つまり、こういうふうにすればこうならないという話になってくる訳です。私これを書いた時に、随分お前さ

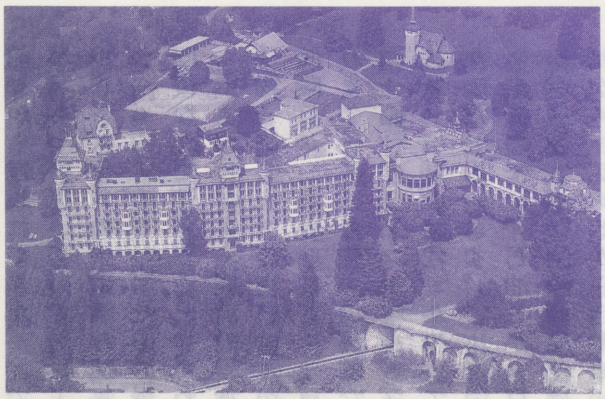
んはペスミスティックな暗いものの考えの持ち主なんだなぁということで、韓国あたりからも翻訳の申し込みがきまして、結構売れているそうです。台湾でも翻訳されまして、今フランスでの翻訳の話が進んでおります。韓国あたりではやはり、日本が無くなってしまうというのは何やら、悪い気持ちはしないというようなこともありまして、売れているのかもしれませんが、グルーミーだなぁと言われた訳です。しかし私、本当は自分ではそういうつもりはありませんで、最もグルーミーな反対側にはですね、最も建設的な考え方の持ち主がいるんだとご理解して頂ければ有り難いと思います。で、この本の年表をご覧になって頂ければ分かりますけど、1995年阪神タイガース十年ぶりに優勝とありますが、これはまったく私の趣味的なものであります。その後に長島茂雄巨人軍監督解任とありますけど、これは私が書いたんではございませんで、文芸春秋の担当者が長島が大嫌いでついでに書いちゃえと、私の許可もなく取り入れたという訳です。

全体の流れとしては、1996年のアメリカ大統領選でクリントンが破れて、共和党のジャック・ケンプが大統領になるということで、だんだんアメリカ自身がアジアからのプレゼンスを少なくしていく。のみならず、アメリカが対日関係ということについて関心を次第に失っていく。今ジャパンバッシングとか何とか言われているのは、まだ関心があるから叩いてくれるんでありまして、関心が無くなると叩くことも無くなってしまう。とうとう日本に対して無関心なアメリカに困り果てた外務省が、ミスター・バッシャーと言われたアマコストをもう一度引っ張り出してきて、叩いてもらってやってみようと言うんだけども、そういう駐日大使人事は実現しない。

そしてだんだん中国との関係も悪くなっていく。そして小沢さんを中心とした勢力は憲法の改正を可決し、様々な地域に日本も出ていって、アメリカ自身は日本に対して関心を薄めていくと同時に、2006年8月、

レポート　コー財団理事に国際MRA日本協会藤田幸久専務理事が就任

来年50周年を迎えるスイス・コーMRA国際会議場マウンテンハウスの施設管理を行うコー財団の理事改選が1月9日行われ、同財団からの要請で国際MRA日本協会よりの推薦を受けた藤田幸久専務理事が他の2名と共に新しく選出された。アジアからの選出は初めて。新体制は右のとおり。



理事長	マーセル・グランディー	(スイス)
副理事長	イリアン・スタリブラス	(スイス)
理　事	アード・バーガー	(オランダ)
理　事	ヴァーナ・ファンカウザー	(スイス)
理　事	ジョーン・フィウ	(スイス)
理　事	マーティン・エカルト・フックス	(ドイツ)
理　事	カタリナ・フィッシャー	(スイス)(新)
理　事	藤田　幸久	(日本)　(新)
理　事	ゲアハルド・グロブ	(スイス)
理　事	アン・ハムリン	(アメリカ)
理　事	レネ・ホーデル	(スイス)(新)
理　事	ジェイムス・ホリボン	(イギリス)
理　事	ジョシ・マイヤー	(スイス)
理　事	ダニエル・モトュー	(スイス)
理　事	ミッシェル・ソンティス	(フランス)
理　事	ピェ・シュペリィー	(スイス)
理　事	クリシュトフ・シュプレング	(スイス)
理　事	イエンツ・ウイルヘルムセン	(ノルウェー)

NAFTAが南北アメリカ共同市場へ拡大。これはもうすでにAFTAと言って、原稿を書いたすぐ後なんですけど、南北アメリカ共同市場みたいな構想が出てきていまして、こういった意味においてアメリカがだんだん南北アメリカ大陸の方へ退いていく。

最後はやはり日中関係で大変大きな問題が起きて、どうしようもなくなり、気が付いてみたら国際収支が赤字、ろくな共同投資もしなかったので、各地でいろんな事故が起こり、とうとう一ドル＝五百四十円ということで、最後は分離・独立して日本は無くなってしまうと、こういうシナリオです。

今日はそういったネガティブな話ではなくて、建設的なお話しということですけど、これからどうやって、どのような姿の日本にしていったら良いかということについて、国内の姿と、そしてその後に色々な国とどのように関わり合い、折り合っていくかといった対外的な話を最後にさせて頂くという運びにしたいと思います。

グローバルプライスィングの時代

まず国内の姿がどのようになっていったら良いかという事の前に、一つだけ認識しておきたい事があります。

この間、七月・九月のGDPが発表になりました。年率三、七％の成長ということで、日本の景気も緩やかだけど回復に向かっているという事が確認された訳です。ただ大変珍しいのは、景気は拡大局面にいくと、大抵物価は少しずつ上がっていくが、今回はむしろ物価が落下した。物価が下落して、景気が上昇に向かいつつあるというおもしろい形です。

もう一方で、国際収支の黒字が段々縮小に向かっている。それも輸出の伸び方が鈍化したというよりも、輸出は依然好調なんだけど、もっと輸入が増えたという形で、国際収支の黒字が縮小していった。こういった形になっています。

これは一体何を意味しているのだろうか。景気の回復ということ●消費が少しずつ盛り上がってきている、個人の皆さんが、主婦も我々も含めて、物をたくさん買い始めたということです。ところが物価が下がっている。そして輸入がどんどん増えている。一方、企業の収益はなかなか良くならない、儲からない。

これは一体何を意味しているのかというと、とりもなおさず消費の増えた部分は、輸入品のウェイトが大変大きいということです。ですからこれは、消費の増えた分を輸入が食っている。ということは、どこから輸入品が入ってきたかというと、これがアジア・太平洋地域、特に東アジアの地域から入ってきているということです。ですから、輸入の中に占める製品比率のウェイトは五十七％ということで、記録的な数字になっています。

ということは、今回の円高が終わった時に我々は何に気付くかというと、東アジアの国々が「えっ、そんな所までもう来たの」というくらい、誠に身近な存在として感じるに違いない。もうちょっと別の言葉で言うなら、もう日本の経済と●ものは、前々から言われてきたことですが、もっと凄い勢いでグローバルなシステムの中に組み込まれつつある。そういった形の景気回復なんだということですね。

ですから、よく経済の言葉で一物一価（一つの物には一つの値段しかつかないこと）と言われますけど、今や「世界的な一物一価」の「グローバル・プライスィングの時代」がやって来たのだと思います。

全てのモノ、石油とか大豆とか、そのような国際商品だけではなく、テレビから自動車、ひょっとしたら人間の値段もそうかもしれない。やがて、一つの仕事をする人間に対する賃金も、世界的に同じものになっていくような圧力が働いてくる。そういう「グローバル・プライスィングの時代」に我々が突入しているということを、最初に念頭に置きたいと思います。

三つのシナリオ

で、これから先、日本が「グローバル・プライスィング」の大きな波の中で、どのように生

きていくだろうかということについて、三つシナリオを出してみたいと思います。

①一億総養老院化

第一のシナリオは、一億総養老院化のシナリオです。標準的な製造業は皆外へ出ていってしまう。今、世界が一斉にマクドナルド本位制なんてことを実施した時に、このマクドナルド本位制は、人間が一時間、一生懸命働く、その労働の対価に対して、ハンバーガーがどれだけ買えますかってことを、通貨というものを全部無くして、ハンバーガーで換算する訳ですね。世界で一番高いのはモスクワです。もうこれは無茶苦茶に高い。しかし日本も相当高い。これはどういうことかというと、日本の消費者物価というのは高い。多分、為替レートは一ドル＝百円前後を大体チョロチョロしている訳ですけど、消費物価でいくと、一ドル＝二百円です。一ドル＝二百円の消費者物価、物によってはそれ以上。それから卸売物価で言うと一ドル＝百四十円から●八十円位。という事は、企業から見ると、一ドル＝二百円で人間を雇って、一ドル＝百六十円で原材料を買って、一ドル＝百円で輸出をしなくちゃならないという現実が起きているから、これはバカバカしいので外に出ていってしまうという現象が、今起きていると思うんです。

これは経済の話になって恐縮なんですけど、設備投資がなかなか盛り上がってこないと言われていますけども、設備投資はやってます。これはソニーでもホンダでも、皆どこでも設備投資で工場を作っています。ただ日本国内でやってないだけの話で、もうどんどん機械とか色々な物が外に出ていくということは、設備投資を輸出しているということです。世界的な規模で見ると設備投資をやっているけど、日本で設備投資をやるのは割に合わない。今こういう姿、形になってきているわけです。

ですから、一ドル＝二百円というものが、これからも続いていくと、皆出ていってしまう。製造業が出て行くだけではない。ここから先は市岡●りますけど、日本経済新聞はこの夏に「日本の劣化が始まる」という社説を連載いたしました。その中で「金融空洞化」という事を書いて、日本での金融取引というのは皆バカバカしくて、どんどん外へ出ていくよ、というのも書きました。

それから、二十一世紀というのは航空貨物の時代になる訳ですが、日本は関西空港という、二十四時間運行の空港ができましたけれども、滑走路は一本だけ。お隣の韓国は金浦沖に、滑走路三本の国際空港を作っている。二十一世紀は確実に航空貨物の、非常に付加価値の高い、室の高い物を飛行機で運んでくるという時代に必ずなる。そうすると何が起きるかというと、日本の上空まで、そういう付加価値の高い物を積んできた飛行機は関空に降りないで、お隣の金浦沖の空港に行ってしまって、そこで荷分けされて、日本に配られるということですから、日本は急行の止まらない各駅停車の国になってしまいます。そういうことになるというのが、この一億総養老院化への道です。

では、なぜ一ドル＝二百円で高いのか。そんなに日本の物価というのが高いのか。その理由は二つある。一つは土地の値段が高い。もう一つは役人でして、なぜ高いかという「規制」の存在です。

ダイエーの中内さんが言われている話ですけど、スーパー一つ作るというのに、トラック三台分の書類を作らなくちゃならないんですってね。トラック三台分の書類を作って役所に持っていかないと許認可が下りない。県庁や市役所は勿論、通産省も運輸省も建設省と、色々な所を走り回って、トラック三台分も書類を作るためには、当然皆それだけの時間も割きますし、道路も込むでしょうし、それだけコストもかかる訳ですから、そのコストは浪費せざるを得ないということで、それは当然のことながら、物の値段は高くなります。「規制」がんじがらめ。

例えば、光ファイバーを張りめぐらせて、日本を高度情報通信社会にしようという話がありますけど、今アメリカにおいて

は、ちょっと後半は足踏みしてますけどね、彼等が考えていることは、多分アパラチア山脈の山奥で、脳に障害が生じて、何とか見てもらわなければならないという時に一応診断をして、その材料を光ファイバーを使った通信網で最も進んだ病院に送って、そしてそこで診断してもらって応急の措置を取るということで、こういうことができうる時代になってくるけれども、日本の場合は厚生省の規制によって、遠隔地で電子メディアを用いた診断行為は、つい最近まで診断行為としては認めないということですから、そんなことをやっても診療報酬は取れないってことで、バカバカしいという話になってしまう。

フロッピーをカルテとして認めない。カルテというのはちゃんとお医者さんが訳のわからない字で書いた物じゃないと、カルテではないようなことを言っていたということですから、これはそういった「規制」でがんじがらめ。こういう話でしたら幾らでもありますけど、そういったことで、日本の物とかサービスのコストを高めているということが、一ドル＝二百円、あるいは一ドル＝百四十円から百六十円の大きな要因になっていると思います。

この間、特殊法人、日本開発銀行とか、皆様にお馴染みの住宅金融公庫なんてのも特殊法人の一つですけど、特殊法人を無くしたらどうかということを、お役所に報告書出してこいと言うのも変な話で、私暴言を吐いたら後で怒られましたが、泥棒に泥棒を捕まえろったって無理なんじゃないの、と言ったわけです。泥棒という言葉は良くないですから、要するにキャッチャーに審判をやらせているようなものじゃないの、と言ったんですけど、全てのボールを全部ストライクにしちゃうというようなものですから、お役人に任せてそんな答えが出てくる訳がないんです。

しかし、これは何とかしなければいかんということで、日本経済新聞は初めての社説の試みで、皆さんに特殊法人で非常におかしい例があるとお感じになっている方々は、ここにファックス番号を書きますから、知らせて下さいという社説を書いた訳です。

そうしましたら、ファックスがパンクしまして、混乱していますけれども、今その中でおもしろいものを調べて、取材して、さらに社説に載せて、一般の紙面を使って、徹底的におかしい、ということをやってみようと思っています。

けれども、そういったことも含めて、実に無駄なことがたくさんあり、一人一人はそこに職があり大変ですから、我々はすぐに首を切ったって構わないじゃないか、という事を言っているのではなくて、三年なら三年、五年なら五年という期間をおいて、その間、職業再訓練するなり、職業を斡旋するなり、そういった事において、税金を使うことは構わないから、しかし、究極はもっともっとスリムにするべきだと考えているんですが、そうはならないというシナリオが、皆出ていってしまったという話でございます。

これが一億総養老院化のシナリオ。

②二十世紀産業博物館

二番目の可能性は、これは日本は二十世紀産業博物館になるというシナリオです。第一の一億総養老院化というシナリオは、先程最初に申し上げました「グローバル・プライスィング」の大波に洗われて、中身が何も無くなって、がらんどうになってしまったというシナリオですけど、二番目は、そういう大波は困るんで、背中を向けて輸入制限をする。物が入ってくるのを止めてしまう。すでにヨーロッパあたりでは、そういう議論がおきています。東アジアで作られた物は、過酷な労働条件で作られているからダメ。公害基準、環境基準をきちんと満たしていない。中には囚人に作らせたような物まである。というような事で、輸入制限をしてもよろしいという声もありまして、そんなことをやるという事です。そうしますと、日本は「グローバル・プライスィング」の大波には洗われない訳ですけどある日、気が付いてみると、国際競争力

が無くなって、そして、かつて二十世紀、光輝いた様々な工場が何も作らずに、そのまま残っていて、世界各地から小学校の生徒たちが社会科見学にやって来るという形が二十世紀産業博物館のシナリオです。

③ハイテク化社会突入

三番目は、これが私の建設的なもので、こう行かざる得ないと考えているんですけど、これは日本はハイテク化社会に突入して行くだろうと、規制を全て撤廃し、スリムな政府にして、六十五歳以上のお年寄りが四人に一人という事は確実にやって来る訳ですけど、これは厚生省の人口統計に基づくもので非常に信頼できるもので、もっと早くやって来るでしょうね。実は2025年、六十五才以上が四人に一人というのは、出生率一、八で考えていますから、今一、五を割ろうとしていますから、もっともっと駆け足でやって来ます。そういう時代に備えて例えば駅の階段をエスカレーターにするとか、そういった様々なことを非常に効率的なハイテク社会に動いていくというシナリオです。

以上を申し上げると、これは何を選んだ方が良いかと言うと、これはハッキリしておりまして三番です。この年表はこれを選ばなかったという話でして、三番に行くしかない。

ただ一つ申し上げておきたいのは、ハイテク社会に突入していったとしても、全ての人が幸せになる訳ではないことを考えて頂きたい。

二十一世紀の人間は四種類になる

多分二十一世紀は私が思うに、これは水木楊ですが、人間は四種類になると思うんです。

第一種は広い意味のコンピューターを使っている人。マイクロソフトのビル・ゲインツみたいなコンピューターを駆使している人。

第二種はコンピューターに使われている人。

第三種は第一種と第二種に属したいけども、はじき飛ばされて疎外されている人。

第四種はそんなも[illegible]初から糞くらえと言って背中を向けて、わしゃあそんなハイテク社会などご免だと、紀州の山奥にでも入って備長炭でも焼いてるぞと、こういうふうに積極的に背中を向ける人。

この四種になるんではないかと思います。

すでにアメリカにおいてはそういった人達が出てきている訳でして、所得水準が階層から見ると、中から下の人達の、物価の上昇率を差し引いた実収入が、むしろここ十年間低下しているという現象がおきておりまして、急速なハイテク化の波に取り残された人々が、一つの政治的な不満層というものを形成して、そしてロス・ペローとか、ああいったような一種のポピュリズムを象徴するような人達を支持しているという現象がおきています。

G7、先進七カ国現象と言いまして、「変化、変化」と皆言うんですね。何か自分が不当に扱われているような気分を皆持っているから変化を求める。どっちの方向に変化するかという方がはるかに大事だと思うんですが、どうして皆変化という言葉だけで満足してしまうのかよく分かりませんけど、リーダーが「変化、変化」と言って権力を取る。しかしそれは何も方向を示している訳ではありませんから、どちらかの方向に進むということはこっちの方向に進まないということですから、こっちの方向については欲望をカットして整理していかなければならないということを意味している。何かに対して「変化」を求めるということは、何かを切って捨てるということを意味している分けですから、当然これはコストがかかるし痛みもある。しかしそれを言わないで「変化、変化」と言ってリーダーになった訳です。しかし何となく自分達の考えている事をやってくれないじゃないかということで、すぐ支持率が低くなっていく。G7現象とは何かと言うと、リーダーの支持率が限りなく失業率に近づいていくというくらい、どんどん低下していく。

そういう現象があるその一つの大きな根底には、非常にめま

ぐるしくハイテク化された社会は動いているけど、何か自分はそこから取り残されている、不当に扱われているんではないかという気分が広がっていて、そういうようなことがあります。現実には学生さんの世界でも、ワープロを使える人と使えない人の時給は全然違うし、ましてやワープロのみならずマックを使うことができる、絵を書いたりすることができる人と、ワープロのみができる人の時給とははっきり違う。それから例えば慶応の藤沢キャンパスでは大変なもので、学生は皆パソコンを持っていますね。それでインターネットとつながっていて、卒論を書く時に原書を読んで、その原書を翻訳した日本人の先生にこれはどういう意味でしょうか、こういう解釈をしてもいいでしょうか、なんてことは聞かないで、直接インターネットでポンと原稿を書いたアメリカやヨーロッパの先生に直接アクセスして、そして自分の考えはこうなんだってなことを言って返事をもらう、なんて現象もおきていますから、そうすると、だんだん先生のやることがなくなって、下手な先生は全然ダメになっちゃうという現象がこれからおきますけど、そういうようなことがすでに始まっているということは、そういうふうなことから遅れた人は一体どうするのかという問題が確実におきてきます。

ここはやはり、職業の再訓練とかを真面目に取り組んでいかないと、日本にも一種の、例えばブロンクスとかハーレムのような形で生まれるかどうか判りませんが、精神的スラムの中に住んでいる人達というのが出てくる恐れがあります。これも頭の中に置いて頂きたい。（続く）

1995年スイス・コーMRA世界大会のお知らせ

本年度の第49回コー世界大会のプログラムが以下の通り決まりました。今年も昨年同様盛況が予想されます。お部屋の確保のためにもなるべくお早めに参加申し込みをされるようお勧め致します。資料は事務局へご請求下さい。

プログラム

7月8日(土)～16日(日)　ヨーロッパ会議＝多様性を持った協調

7月18日(火)～26日(水)　「明日の社会を考える」

7月19日(水)～22日(土)　日米欧経済人コー円卓会議

7月28日(金)～　産業人会議

8月2日(水)　「社会に健全な変革をもたらすための
ビジネスと産業の役割」

8月4日(金)～11日(金)　都市問題会議「都市に人間の心を取り戻す」

8月14日(月)～24日(木)　地域紛争会議
「危機に直面する地域、危機を脱しつつある
地域ー互いの経験に学ぶ」

（訳は全て仮訳です）

▽事務局通信△

●早いもので五月も中旬となり、今夏のコー世界大会の開幕（七月八日）まであと一ヶ月半となりました。昨年は大変な盛況で、時期によってはマウンテンハウスに泊まれなかった参加者も出ました。参加を予定されている方はお部屋の確保のためにもなるべくお早めにお申し込み下さい。詳しい資料を事務局へご請求下さい。

●四月にフィジーから高校生のアパーナ・カトリさんが来日し、十日間にわたり東京や大阪など各地でMRA関係者などと交流を深めました。東京ではMRAサポート青年グループ「ユースフル」が歓迎会を主催したり、TDLや鎌倉観光などにも多数のメンバーがエスコートするなど、多彩なスケジュールが組まれました。アパーナさんはフィジーのMRAフルタイマーのスレシュ（リーナ）・カトリご夫妻のお嬢さんで、フィジーの日本大使館のエッセーコンテストに応募し、見事一般部門最優秀作品に輝き、副賞として今回初めて日本を訪問する機会が与えられたものです。フィジーと日本がもっと身近な国になるために今回の経験を活かした活躍が今後とも期待されます。

●【六月の月例会】城山英明東京大学助教授を講師にお招きして、六月三十日（金）午後六時半より文京シビックセンターで行います。